令和4年7月号 No.171

隠元禅師と龍渓禅師

本会会長　原田博二

承応3年(1654)7月５日、長崎に到着した隠元禅師(以下、隠元と記述)は、翌6日、興福寺に入り、4代住職に就任、さらに明暦元年(1655)5月、興福寺の住職を兼任したまま崇福寺の4代住職に就任した。なお、現在、興福寺では、隠元を4代住職ではなく、開法開山として崇めている。

そのようななか隠元を妙心寺(正法山・京都市)の住職に招請しようとする運動が持ち上がった。この運動は、竺印祖門と千山玄松が始めたものであるが、まもなく龍渓禅師(以下、龍渓と記述)がその運動の中心となった。

龍渓(1602～70)は、京都の奥村清一郎の子で、16歳の時、臨済宗普門寺(慈雲山・大阪府高槻市)の住職　籌室(ちゅうしつ)玄勝について出家、後に同寺の9代住職、さらには妙心寺の住職に就任した。

ところで、臨済宗は、禅の五家の一つで、禅をインドから中国に伝えた達摩から数えて11祖臨済義玄によって開かれた。

臨済宗は、その後、臨済から数えて8世(以下、「臨済から数えて」を略)黄龍慧南の黄龍派と8世楊岐方会の楊岐派に分かれた。

その内、楊岐派の14世密庵咸傑の弟子で15世松源崇岳の禅は、わが国にも伝えられたが、大徳寺(龍宝山・京都市)を開いた宗峰妙超、さらにその弟子で妙心寺を開いた関山慧玄はその法系であった。

一方、隠元も14世密庵の弟子で15世破庵祖先の法系に連なる31世費隠通容に嗣法したので、妙心寺派も隠元も同じ楊岐派、隠元が妙心寺の住職に就任しても何ら不思議ではなかったのであるが、なぜかその住職招請は反対された。

龍渓墓塔(京都府宇治市・黄檗山塔頭万松院内)

そこで、龍渓らは、妙心寺の住職招請を一旦断念、隠元を普門寺の住職に招請した。

そこで隠元は、弟子たちとともに明暦元年(1655)8月９日、長崎を出発、9月６日、普門寺に入り、住職に就任した。

普門寺(大阪府高槻市)

普門寺は、明徳元年(1390)臨済宗建長寺派の説厳の開創と伝えられているが、その後、荒廃、永禄4年(1561)三好長慶が同寺の復興に合わせて堀や土塁を築いたので、一帯は普門寺城と呼ばれた。

さらに永禄11年(1568)には三好長慶らによって擁立された足利義栄が同寺で将軍宣下を行い、室町幕府14代将軍に就任している。

慶長9年(1604)臨済宗妙心寺派に転派、龍安寺(大雲山・京都市)の末寺となり、元和3年(1617)9代住職となった龍渓が伽藍を整備した。

以後、龍渓は、隠元の日本永住ならびに新寺の建立と隠元の住職就任について奔走、その効あって、万治元年(1658)隠元が4代将軍家綱に謁見、隠元の日本永住と萬福寺の建立、さらには黄檗禅(宗)の開立が実現した。

このように龍渓は、萬福寺開創の最大の功労者であった。

龍渓は、以後も幕府、さらには朝廷との交渉に尽力、黄檗禅(宗)興隆の基礎を確立した。

寛文4年(1664)正月、隠元は龍渓に付法、龍渓は隠元の和僧として最初の法嗣となった。しかし、龍渓が黄檗派に転派したことから、以後、龍渓の名は、妙心寺と龍安寺の世代から除かれた。

寛文7年(1667)龍渓は後水尾法皇に付法、法皇は、龍渓の黄檗禅における唯一の法嗣となった。

以後も法皇の龍渓に対する信任は厚く、寛文8年(1668)龍渓は、法皇より「大宗正統禅師」の禅師号を贈られた。

このように龍渓の活動は順調であったが、寛文10年(1670)九島院(霊亀山・大阪市)に滞在中の8月２３日、木津川と安治川が氾濫、示寂(溺死)した。時に69歳であった。

本稿は、第2回公開講座の第2部「隠元禅師ゆかりの国内寺院」の発表要旨である。